

青少年におけるスポーツ離脱を防ぐための一考察

～大学生のスポーツ継続要因を参考にして～

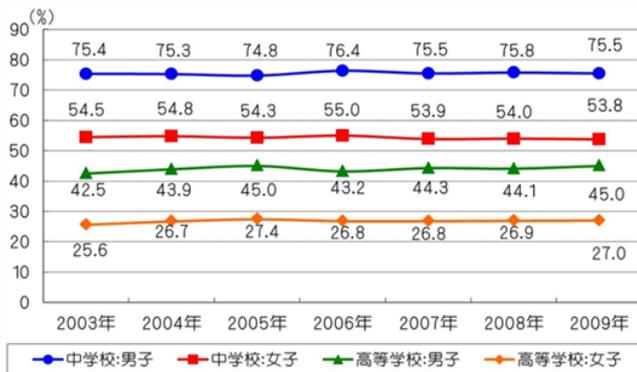
1160387 泉由里奈

高知工科大学マネジメント学部

はじめに

日本における、青少年のスポーツ活動は、小学校・中学校・高等学校等の教育機関内での運動部活動を中心に展開されている。これは、日本独特の文化であり、青少年スポーツが学校中心で活発に行われている国は日本以外にはないとされている。だが、この学校を中心とする日本のスポーツ振興システムは、数多くの問題を抱えており、その結果スポーツから離脱していく青少年が多く存在するという現状がある。

図1 中学校・高等学校体育連盟加入率＝運動部活動加入率



出所：原田宗彦、2011、69頁より筆者作成

図1を見ると、中学校男子が最も部活加入率が高く、高等学校女子が最も低いことが分かる。中学校と高等学校の加入率を比較すると男子が約3割、女子は約半分の割合で部活動への加入率が減少している。つまり、中学校で部活動に加入しスポーツ活動を開始した「スポーツ実施者」は、高等学校に入ると何らかの理由でスポーツから離れてしまうという「スポーツ離脱」が起こっている。

このような現象は、中学校から高等学校だけに限らず、小学校から中学校、高等学校から大学といった各スパンの間で起こっている。つまり段階を重ねるにつれ徐々にスポーツ実施者は減少しているのだ。その理由はいくつも考えられるが、せっかくスポーツ実施者となったにも関わらず、後述するような継続性のない仕組みによって、スポーツから離れさせてしまうのはもったいない事であり、スポーツは好きでも活動できないという人が多く存在するのではないだろうか。スポーツ活動を開始した「スポーツ実施者」のスポーツ離脱を少

しでも防ぐことが出来れば、スポーツ人口の増加が期待でき、生涯スポーツとしてスポーツに長く関わる人が増えていくのではないだろうか。いずれにせよ、私自身が幼い頃からスポーツを続けてきた経験から、青少年がスポーツを継続して長きに渡って関われるための方法について提案したいという思いを抱いている。人はなぜスポーツをするのかという研究は数多くなされておられ、スポーツをなぜ続けるのかということに関しては、スポーツ参加を対象にした研究でいくらか行われてきた。それゆえ、私自身もスポーツを継続する要因は何かについて検証することで、青少年のスポーツ離脱を防ぐための参考となる資料のひとつになるのではないかと考えた。

そこで本論では、大学生におけるスポーツ継続に影響を与えているものは何かについてスポーツの社会化理論という考え方をを用いて、大学生におけるスポーツの参加要因・継続要因について明らかにする。

以下、本論では、まず青少年におけるスポーツ実施の現状及び問題点を、先行研究などを用いながら整理する。次に、スポーツを継続してきた大学生を対象として、スポーツの継続要因についてのヒアリング調査を実施し、なぜスポーツをするのか、どのような経験が現在のスポーツ実施に影響を与えているのか、どのようにモチベーションを維持してきたのかについて調査する。そして、結果を先行研究と照らし合わせながら整理し、青少年のスポーツ離れを防ぐ方策について考察する。

第1章 青少年におけるスポーツ実施の現状と問題点

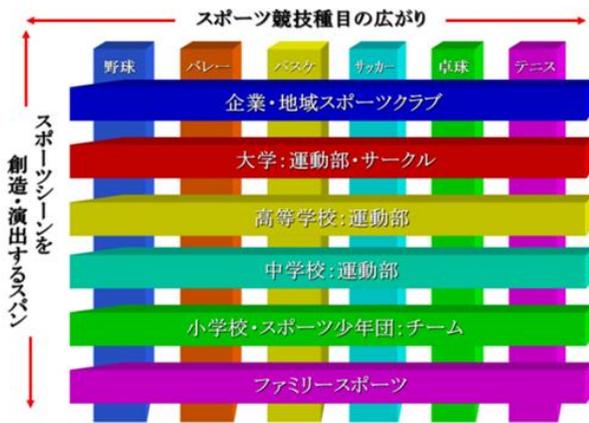
第1節 隙間だらけのスポーツ振興

青少年のスポーツ離脱に影響を与えている大きな要因として、日本のスポーツ振興システムが挙げられている。

近年のスポーツ界では、メディアの発達によってスポーツに接する機会が増えたり、ニュースポーツの普及によるスポーツ種目の多様化が進んでいたり、スポーツが私たちにあって、より身近な存在となってきた。スポーツを行うことの効果は数多いが、おもに青少年の心身の健全な発達を促

し、自己責任や心の強さを培うとともに、コミュニケーション能力、他人に対する思いやりの心を育むことができると言われている。さらには心身のストレスの解消にも繋がり、青少年の健全育成において必要とされている。

図 2 隙間だらけのスポーツ振興



出所:原田宗彦、2011、66 頁より筆者作成

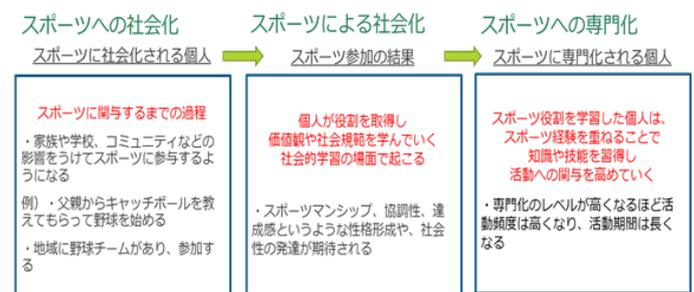
しかし、その一方でスポーツを親しむ場やスポーツを行う場は、図 2 のように、小学校から大学までの教育機関内での部活動、そして企業・地域スポーツクラブなどの各スパンによって区切られているために、継続を確保するための仕掛けがない。例えば、小学校で少年チームに所属した児童は、小学校の卒業があり、中学校で部活動に入部した生徒は、中学 3 年生の秋ごろになると引退が求められてしまう。このようにスポーツを行うようになっても実施者の欲求に関係なく半強制的に区切られてしまうのである。そしてこのシステムによって、新しいステージで活動を始めるまでの数か月間のブランクが生じてしまうことから、スポーツ欲求の低下や短期間で成果や結果を求められることによる、スポーツ障害・バーンアウトなどのモチベーションの低下を引き起こし、結果スポーツの離脱を招いているとされている。そして、学校教育機関を卒業して、地域でクラブに加入する人は 16%にとどまっており、年齢を重ねるにつれて参加率が徐々に低下しスパンとスパンの隙間からポロポロとスポーツ実施者が抜け落ちてしまっているということが、日本のスポーツ振興システムの問題として挙げられている。

第 2 節 スポーツの社会化理論

先行研究において、運動・スポーツ活動を継続的にこなしている「スポーツ参加者」は日々のスポーツ活動を通して、「スポーツへ社会化されている」ことがいわれている。スポ

ーツへの社会化とは、個人が他社との相互作用を通してスポーツの社会的世界に適応するための態度や行動を学習する過程のことである(住田他、2009)。また、スポーツ活動の実施、スポーツ活動の継続についての先行研究において、スポーツの社会化理論という考え方が用いられている。スポーツの社会化理論では、個人がスポーツ役割を学習するまでの過程を、「スポーツへの社会化」「スポーツによる社会化」「スポーツの専門化」の三つの段階を経ると説明されている(原田宗彦、2011、96 頁)。ここでは、これら三つの段階について説明する。

図 3.スポーツの社会化と専門化の概念モデル



出所：原田宗彦、2011、97 頁をもとに作成

① スポーツへの社会化

スポーツへの社会化は、個人がスポーツに関与するまでの過程であるとしている(住田他、2009)。家族、仲間集団、学校、コミュニティ、マスメディアといった社会化エージェントが、スポーツに参加するきっかけを個人に与えることによって生じる(原田、2011、98 頁)。スポーツへの社会化に影響を与える要因として、『個人的属性』(性別、年齢、価値観など)、『重要な他者』(親や兄弟、友人)、『社会化状況』(社会化が行われる場)があると報告されている(住田他、2009)。たとえば、父親からバッティングやキャッチボールを教えてもらって野球を始めたり、姉がスイミングスクールに通っていたことから水泳を始めようになったりすることである。また、テレビ、ラジオ、映画、新聞、本、雑誌といったマスメディアからの刺激を受けてスポーツに取り組むようになることがあり、「スラムダンクを見てバスケットに興味を持った」などメディアを通してスポーツに参加するようになるといったことも報告されている。

②スポーツによる社会化

スポーツに参加するようになった個人が、その場での役割

を取得していき、その環境や他者の影響によって価値観や社会規範を学んでいく段階である。スポーツの社会的世界に適応していくことで、スポーツマンシップ、誠実、勇気、協調性、達成感というような性格形成や社会性の発達が期待される。

③ スポーツの専門化

役割を学習した個人がスポーツ経験を重ねることで、知識や技能を習得し、活動への関与を高めている段階である。このスポーツの専門化は、スポーツに対する欲求がとて強い段階で、専門化のレベルが高くなるほど、自主的にスポーツを行う頻度は高くなり、活動期間は長くなるという傾向があると言われている。

この専門化に着目してみると、現在のシステムは、専門化レベルに到達する前にスポーツの離脱を引き起こしているということが考えられる。スポーツ実施者をスポーツの専門化まで促す仕組みがあれば、スポーツの継続性は高まるのではないだろうか。ただ、スポーツへの専門化は、バーンアウトなどを引き起こすという問題もあり、スポーツ離脱のひとつの要因になることもある。しかし、スポーツへの社会化の部分がしっかりと土台としてなされていれば、種目を変えたりなどの競技の離脱はあるかもしれないが、スポーツそのものからの離脱は防げるのではないだろうか。

第2章 スポーツ実施に与える影響

スポーツを現在まで継続している大学生を対象にヒアリング調査を実施した。なぜスポーツをするのか、どのような経験が現在のスポーツ実施に影響を与えているのか、どのようにモチベーションを維持してきたのかについて調査し、まず表1のように、1人1人の調査結果をライフコースに沿うように要因ごとにまとめた。

表 1.Nさんのスポーツ履歴まとめ

	競技	特性	環境要因	重要な他者	心理的要因
幼少	サッカー	・サッカーを遊ぶと遊んでいた	・家が団地で周りにサッカーをしている子が多かった	・先輩	
小学 1年	サッカー	・不器用ですぐ出来なかった ・向上心 ・負けず嫌いな	・指導者が厳しくて嫌になって辞めようとした ・殴られる、けられる ・同級生もやめたから	・兄がサッカーをしていた ・親にとめられた	・楽しい ・好き ・周りとの関係が崩れるのが怖い
中学	サッカー	・自分の好きな戦術のサッカーが出来た	・指導のスタンスが変わった ・チーム関係が良かった	・友人・仲間 励まし合って	・鬼コーチから解放される ・うれしい ・たのしい ・達成感
高校	サッカー	・プライド	・家の前の高校 ・監督が変わり、今までの指導とは全く異なった ・チーム関係が悪い ・ずっとやっていたポジションを変えられた ・最初から最後まで喧嘩		・サッカーは好きだった ・楽しくはなかった ・つまらなかった
大学	フットサル	・サッカーが嫌になってフットサルサークルに入った	・自分たちで練習方法や試合の出場を管理 ・監督がない		・ボールを蹴りたい ・身体を動かしたい ・楽しい

次に、スポーツ参加・継続に影響を与えた要因について分析を行った。その際に、隙間はいつどんな時に見られたか、それを乗り越えるきっかけとなったことは何かについて特に注目した。

調査結果を基に、各教育段階で見られた隙間に関係している要因や継続要因についてカテゴリーに分けて表を作成した。調査を行った8人の結果を以下のようにまとめた。

① スポーツ参加要因について

表 2.スポーツ参加要因まとめ

参加要因	人数	例
重要な他者	全員	・両親に誘われた ・兄・姉がやっていた ・友達に誘われた
過去のスポーツ体験	4人	・小さい頃にその競技をして友人と遊んでいた ・父親とキャッチボールをしていた
あこがれ	2人	・ドラマ・漫画をみて ・Wカップをみて内田選手にあこがれた
スポーツ環境が整っていた	2人	・近くに新しい道場ができた ・家にゴルフ場があった

表2から、スポーツ参加は、「重要な他者」と「過去のスポーツ体験」が大きな影響を与えているという結果となった。「スポーツを始めたきっかけとなったのは何ですか」という質問に対し全員が両親や友人などの「重要な他者」に影響を受けたと回答した。例えばSさんは、「元々卓球をやっていた母が、近所に新しく道場ができることを知り、姉と一緒に連れて通うようになったのがきっかけだった」と言っており、Oさんは、「従兄弟がやっていたのをみて自分もやりたくなった」と言っていた。本研究の回答者が語るなかで、特に家族や親戚といった比較的身近な人に影響を受けてスポーツをはじめるというケースが多くみられた。「過去のスポーツ体験」

については、「小さい頃にバドミントンで遊んでいたのが楽しかった」というKさんや「父とキャッチボールをしていたのがきっかけでソフトボールを始めた」というDさんなど、スポーツ少年団への入団や部活動への入部に過去のスポーツ体験が影響を与えているということも分かった。

その他の発見としては、テレビやスポーツメディアなどを見て「カッコイイ」「自分もやってみたい」などの「あこがれ」を抱いてそのスポーツに興味を持ったというケースや、近くに道場ができたり、家にゴルフ場があったりと身近にスポーツに参加できる環境が整っていたということがスポーツ参加の影響を与えている要因であることが示唆された。

また、今回ヒアリング調査を行った8人全員が、幼少期あるいは小学期といった比較的早い時期からスポーツ活動を開始していたという特徴が見られた。

② 隙間が見られた時期と隙間要因について

表 3. 隙間の時期と要因まとめ

	指導者	バーンアウト	仲間関係	他にやりたいことあり	部活がない	たのしくない
幼少・小学	3人		1人			1人
小学→中学					4人	
中学→高校						2人
高校→大学	1人	2人	1人	3人		1人

隙間が見られた時期とその要因についてまとめた結果、隙間が最も多く見られたのは高校から大学までの期間で、要因については6つの要因が挙げられた。高校から大学での隙間要因には、バーンアウトや就職したいという理由からスポーツを辞めようとしていた人が多かった。そして、小学期から中学期には、やりたい競技の部活がなかったということが4人にみられ、全ての人が自分のやりたいスポーツではなく、そのスポーツと似たようなスポーツ、又は全く異なる競技を始めていた。

指導者の影響を受けて、スポーツを辞めようと思ったことがあるという人は、小学期と高校から大学の間で多く見られた。特に、幼少期・小学期では厳しい指導者に耐えられずスポーツを辞めようとしていた人が多かった。「クラブチームの指導者が厳しくて、辞めたかった」(Oさん)、また、高校から大学の間で指導者の影響が見られたNさんは、「高校の指

導者と合わなかった。同級生の喧嘩に巻き込まれてずっとやっていたポジションを指導者に変更させられた。それがきっかけで、サッカーを辞め、大学ではフットサルをすることにした」と語っており、高校の指導者と合わなかったこと、そして仲間関係の悪さから、サッカーに対するモチベーションの低下が起り、サッカーを辞めてしまっている。

また、「たのしくない」というスポーツに対するモチベーションが低い状態にあると隙間が見受けられることが多かった。このたのしさを感じなくなってしまった要因には、「結果が出なくてつまらないから辞めようと思った」(Yさん)や「同級生と仲が悪かった」(Nさん)など、求めている結果や仲間関係が良くないことが関係しているということが分かった。

③ 隙間を乗り越えた要因と隙間が出来なかった要因

スポーツの継続要因に影響を与えたものについて、表4から表7で教育段階ごとにまとめ、分析を行った。

表 4. 小学期の継続要因

隙間を乗り越えた要因	隙間が出来なかった要因
<ul style="list-style-type: none"> 両親に止められた(3人) みんながやっているから(1人) 辞めたら怒られるかもしれない(1人) 周りとの関係が崩れるかもしれない(1人) チームに迷惑かける(2人) 	<ul style="list-style-type: none"> たのしい

表4の結果から、小学期のスポーツの継続には、親の存在が大きく関係していることが分かる。この段階での継続要因で挙げられた「たのしい」とは、「褒められるのが嬉しい」、「出来ないことができるようになった」などの充実感や達成感から得られたたのしきであった。また、「みんながやっているから辞められなかった」、「チームに迷惑がかかるから」といった、友人やチームメイトなどの周りの影響も関係していた。

表 5. 小学期から中学期の継続要因

隙間を乗り越えた要因	隙間が出来なかった要因
<ul style="list-style-type: none"> 先輩に誘われた 姉に誘われた 負けず嫌い 小学校の時にやっていた競技の部活があった スポーツが好き 似ているスポーツに変更した 	<ul style="list-style-type: none"> 鬼コーチから解放される チーム関係が良かった たのしい 出来ないことができるようになる達成感

この期間での隙間には、「入りたい部活がなかった」という要因が4人に見られた。4人すべてが、したかったスポーツとは異なる競技の部活動に入部しており、そこには「先

輩から誘われた」といった、「重要な他者」の影響がみられた。また過去のスポーツ経験が競技選択に影響を与えており、「小学校の時にやっていた競技の部があった」という、複数の競技を小学期に経験したことが、継続することができた一つの要因であったケースもあった。

隙間が出来なかった要因には、小学校で指導を受けていた厳しい鬼コーチからやっと解放され、たのしく活動を続けられるという期待や、仲間関係の良さなどが関係していた。

表 6. 中学期から高校の継続要因

隙間を乗り越えた要因	隙間ができなかった要因
<ul style="list-style-type: none"> ・親戚に勧められた ・痩せるため ・ずっとやっているから ・両親が熱心だった ・授業料が免除になる 	<ul style="list-style-type: none"> ・教わりたい指導者がいたから ・兄と同じ学校 ・高校にあこがれ(ユニホームや先輩) ・たのしい(2人) ・好き(2人) ・誘われた ・レベルの高いところで頑張りたいという向上心 ・中学生の時の同級生も一緒だった ・本気でやりたい ・身体を動かしたい ・帰宅部にはなりたくない

表 6 では、心理的な要因が継続要因に影響を与えている人が多かったように思う。隙間が出来なかった要因では、「たのしい」、「好き」、「レベルの高いところで頑張りたい」、「本気でやりたい」、「教わりたい指導者がいた」など、スポーツそのものが好きだというものや、技術力の向上や結果を求め高いモチベーションを感じる要因が多かった。そしてこの教育段階が、一番隙間が少なかった。

表 7. 高校から大学の継続要因

隙間を乗り越えた要因	隙間が出来なかった要因
<ul style="list-style-type: none"> ・競技を変更した ・ボールは蹴りたい ・スポーツは好きだから ・高校生の最後の試合で悔いが残った(2人) ・強いチームでもう一度やりたい ・大学の監督から誘われた(2人) 「チャンスがあるならやろう」 ・先輩に誘われた ・高校の監督に勧められた(半強制的に) ・親への負担を減らすため 	<ul style="list-style-type: none"> ・不完全燃焼だった ・好き ・悔しい ・たのしい ・もう少し頑張りたい ・負けず嫌い

表 7 では、指導者の影響を受けてスポーツを継続している人が多くみられた。就職をしようと思っていたけど、「大学の先生に誘われ、もう一度チャンスがあるならやってみようと思った」(O さん) や、「監督に大学で続けたらもっと伸びるぞといわれた」(I さん)、「まだ頑張れると監督に言われた」

(N さん) など高校の監督の期待がスポーツ実施に影響を与えスポーツを続けたいと思ったという人がいた。また、隙間

がみられなかった要因では、たのしい、好きといった「スポーツの専門化」がみられる回答や、高校最後の試合結果に悔いが残り、不完全燃焼で終わるわけにはいかない、もう一度頑張りたいと思って続けている人も多かった。

どの教育段階でも、「たのしい」や「好き」などといった心理的要因が、継続要因と関係していた。そして、高校入学・大学入学といった継続年数が長くなってきた頃には、スポーツを頑張りたい、強くなりたいという要因が増えていることから、スポーツ経験が長くなればなるほど、スポーツに対する欲求は強くなっていくということが分かった。

第 3 章 青少年のスポーツ離脱を阻止するには

調査の結果、青少年のスポーツ活動を促進するうえで必要となるものは、親の干渉と指導者の指導の仕方、そしていかに楽しさを深められるかが大事だということが明らかになった。

① 青少年のスポーツ活動に影響を与える存在

今回の調査を行った 8 人は、幼少期もしくは小学期といった比較的早い段階からスポーツ活動を開始しており、これに最も影響を与えている要因は、親や兄弟、友人といった「重要な他者」の存在であることがわかった。特に家族の与える影響は大変強いといえる。年上の兄弟がいて且つその人がスポーツ実施者となっている場合や、親がスポーツ経験者でスポーツ活動に対し肯定的であると、スポーツが一気に近い存在となるため、スポーツに興味を持ちやすくなる。つまり、身近にスポーツ実施者がいることは、「スポーツへの社会化」が起きる上で、重要な要素だといえる。

スポーツ離脱を阻止する要因においても「重要な他者」の存在が、大きな影響を与えることがわかった。幼少期・小学期でスポーツの離脱が起こりそうになったとき、スポーツへの継続を支持していたのは多くの場合親の存在だった。D さんのように、少年団チームをやめようとした時、親がそれを強く否定し継続へと促していたことや、親の期待に応えたいといった、親からの応援や支えが子供のスポーツに対するモチベーションに繋がり、現在のスポーツ活動にも影響を与えていることが分かった。このことから、親がスポーツに対して肯定的で、かつ協力的であることは、青少年のスポーツ活動に良い影響を与えることに繋がり、活動の継続性を高める上で重要な要素であるといえる。青少年のスポーツを活発に

させるためには、親を巻き込んでいくこと、そして、親のスポーツへの重視度を高めていくことが有効ではないかと考えられる。

② 幼少期におけるスポーツ経験の重要性

今回の調査で、幼いころのスポーツ経験が、その後のスポーツ実施に影響を与えているということが分かった。幼いころに友人と遊んでいたことや、父親にキャッチボールを教わっていたことがスポーツを始めるきっかけになっている。また、ひとつの種目に限らず、小学校での行事やクラブにおいて複数の競技を経験していたことが、その後の競技選択の幅を増やしているということもわかった。複数のスポーツをできるだけ早い段階から経験しておくことで、やりたい競技ができない場合や、バーンアウトが起きてしまったときに、異なるスポーツへの変更が可能となり、スポーツからの離脱を防ぐことができるのではないかと考えた。このような別競技への選択肢が生まれることは、スポーツ離脱を防ぐことが出来る一つの方法ではないだろうか。

③ スポーツ活動に指導者が与える影響

今回の調査の結果、スポーツの継続において、親の存在だけでなく、指導者の存在が与える影響も大きいことが分かった。スポーツ継続を促す重要な要因として、特に、高校から大学でのスパンでは指導者がスポーツ実施者の継続を促すという良い影響も見受けられた。「辞めようと思っていたけど、監督に大学を紹介され、それが続けるきっかけとなった」という D さんや、「大学の監督に声をかけてもらった」という O さんなど、次のステップで活動を続けるきっかけを指導者が与え、継続に繋がっている人がいた。

しかし、指導者の与える影響は、プラスの影響に限らず、時にはマイナスの影響を与えてしまう可能性もある。後述するが、スポーツの「たのしさ」はスポーツへの専門性が高くなればなるほど、勝利主義なものに変わっていきがちである。いずれにせよ、幼少期や小学期といったスポーツ実施者となって間もないころは、友人とたのしく遊んだり、周りから「すごいね」などと褒められたりすることに「たのしさ」を感じている傾向が見られた。この時期の参与要因は、友人がやっているから一緒にやりたい、褒めてもらいたいからやっているなどの理由が多いといえる。そのため、幼少期や小学期の段階では、怒ったり殴ったりといった勝利主義な指導方法は、

児童に恐怖心を感じさせ、スポーツが嫌になる大きな要因になってしまうことがある。指導者の指導方法によっては、指導者がスポーツ実施者をスポーツ離脱へと促してしまうこともあるといえる。それゆえ、指導者は各教育段階でスポーツ実施者が求めるものを理解しなければならない。スポーツ実施者の特性や求めているものについて理解した上で、指導を行っていく必要があるといえる。

また、これらのことから、青少年におけるスポーツ離脱を阻止するための方策として、スポーツを継続させるための次のスパンへの道をつくるきっかけ作りが必要だと考える。今回の調査で明らかとなった、指導者からきっかけを与えてもらうという環境を作るのは難しい。そこで、次のスパンで活動を行っている実施者との交流を行える場を増やすと良いのではないか。たとえば、大学生は高校生、高校生は中学生、中学生は小学生の部活動に参加し、練習をして指導を受けたり、試合をしたりするなどの交流ができる機会を月に 1.2 回程度設けるのはどうであろうか。このような次の段階の指導者や先輩と交流する時間ができることによって、専門的な吸収だけではなく「この先輩と一緒にしたい」、「この高校に頑張りたい」というような、学校や先輩への「あこがれ」を生むことも期待できる。たての隙間を埋めて実施者本人が自ら継続するきっかけを得られる場をつくることができれば、スポーツの離脱を防げるのではないかと考えた。

④ スポーツ実施者が求める価値「たのしさ」とは

継続に影響を与えている要因として一番多く見られたものは、「たのしさ」という心理的な要因だった。教育段階によって感じる「たのしさ」は異なるが、スポーツを継続していくために必要な自発的な参加には、この「たのしさ」が関係していることが分かった。幼少期や小学期では、周りからほめられてうれしいということが「たのしさ」に繋がっていたが、経験年数が長くなっていくにつれて、出来ないことが出来るようになった時や、試合に勝てるようになった時など、技術力の向上や自分が求める結果が出た時に「たのしさ」を感じている人が多かった。このような経験を繰り返すことによって、「試合に負けたのが悔しくて続けることにした」、「不完全燃焼だった」、「もっと強いチームでやりたい」などの向上心を生み、モチベーションが上がり、スポーツ活動の継続に繋がっていたといえる。

また、どの時期においても仲間関係のよさがスポーツの「たのしさ」を感じることに影響を与えていることも分かり、人間関係の重要性も明らかになった。

以上のことから、指導者は、各教育段階によって異なる「たのしさ」を理解し、「たのしさ」を深められるように指導方法を工夫していく必要があるといえる。よって、幼少期に結果を求める厳しい指導は、良い影響を与えるとは言えない。友達と協力して出来るたのしさを感じさせ、なにより「ほめる」ということが大切である。幼少期のうちにスポーツに対するイメージを「たのしい」ものにできればその後の長いスポーツ実施が期待できる。かといって、緩い環境ではなく、時として厳しさは必要であり、社会規範や協調性など人間形成の指導は大切である。

そして、スポーツを続けていく中で「スポーツ実施者」は徐々に専門性を求めていく傾向にあり、それに伴って「たのしさ」も勝利志向なものに変わっていることが分かった。実施者のスポーツに対する「たのしさ」を深めるために、スポーツの専門性を求めた場作りが必要だと考える。例えば、そのひとつとして、子供から一般の人までが参加できる練習会を地域ごとに開催して、その際に有名な監督や選手を招待し、世代間を超え、自分よりも上の段階の人と交流ができる機会をつくるといったことも考えられる。「たのしさ」を学び、深められる場を作ることは、スポーツ継続者を増やす上で必要な取り組みであるといえる。

実際に、私の出身地である愛媛県では、再来年に開催される愛媛国体の強化に向けて様々な取り組みが行われている。県の少年チームや一般のチームの合同練習が行われており、そこに全国でも有名な指導者・選手を強化練習会に招待し、一緒に練習を行う場や、指導してもらう時間を作っている。これは、選手の技術力の向上だけでなく、有名選手のレベルの高い技術を見て学び、育成選手のモチベーションの向上も期待される。このような取り組みをその時期だけに限らず、定期的且つ大々的に行うことで、モチベーションの維持だけでなくスポーツの「たのしさ」を学ぶ、感じる、深めるきっかけをつくる場にはできるはずである。そしてさらに『あの人のようになりたい』という憧れの形成や、『もっと出来るようになりたい』といったモチベーションの維持に繋がり、スポーツに自発的に参加する青少年の増加が期待できるのでは

ないだろうか。

おわりに

スポーツ離脱を防ぐ方法として、私は、「たての隙間を埋められる取り組み」と「たのしさを深められる取り組み」を提案する。

前者については、今回の調査で、この隙間だらけの仕組みを支えるような動きが指導者の行動に見られた。指導者が次の段階への道づくりやきっかけを与えており、それらに影響を受けてスポーツ活動の継続が可能となっていた。隙間が空いているならそれを埋める動きが必要ではないか。当たり前のことではあるが、実際にはなかなかできていない現状である。第3章③スポーツ活動に指導者が与える影響に詳しく述べたように、たての関係を築ききっかけとなる場を作ることによってスポーツ参加者自らが、次の段階でも活動を続けるきっかけを得られ、その結果、自発的なスポーツ参加者の増加が期待できる。

後者の「たのしさを深められる取り組み」については、指導者の指導方法の工夫や、強い選手や監督との交流が出来る場を設けることができればよいのではないかと。「たのしさ」はスポーツへのモチベーションを維持・向上させるために重要な要素であった。幼少期では友人と一緒にできるよこびや褒められる嬉しさなどが「たのしさ」に繋がっており、中学校以降は、技術の向上を感じるによって得る達成感や充実感、そして、試合の勝敗が関係していることが明らかになった。幼少期には、人間的な成長とスポーツに対するイメージを「たのしい」ものにできるような指導を行い、中学期以降は、専門性が高められるような指導を取り入れるといった指導方法の工夫が必要である。教育段階によって異なる「たのしさ」を理解し、指導者と実施者の間に生じる“ずれ”をいかに減らすことができるかが指導者に求められるものだと思う。

そして最後に、スポーツの社会化と専門化の概念モデルにはない、スポーツへの社会化とスポーツによる社会化の段階のなかで、スポーツの専門化の要素を少しずつ組み込んでいいのではないかと考える。スポーツの専門的なたのしさをもう少し早い段階から感じられることが、スポーツ活動を促進させる上で必要なのではないかとと思われる。

これらのことから、青少年のスポーツ離脱を阻止する取り

組みとして「たての間を埋める取り組み」と「たのしさを深められる場づくり」が必要であるということの本論の結論としたい。

参考文献

原田宗彦編著(2011)『スポーツ産業論 第5版』杏林書院。

住田健・藤本淳也・祐未ひとみ(2009)「高校生の運動・スポーツ活動の実施および継続に関する研究」『大阪体育大学紀要』第5号。

太田雅夫・柳澤裕哉(2002)「スポーツにおける社会化要因の検討ー競技スポーツ参加に影響を及ぼす他者と活動継続についてー」『天理大学学報』第203号。

二宮浩彰・菊池秀夫・守能信次(2006)「専門志向化の概念枠組みによるウィンドサーファーの類型化とその指定指標」『レジャー・レクリエーション研究』第56号。

「運動部活動は日本独特の文化であるー諸外国との比較から」

中澤篤史 / 身体教育学

<http://synodos.jp/education/12417/2>

「スポーツ振興基本計画の在り方について

-豊かなスポーツ環境を目指して-」(文部科学省)

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/old_chukyo/old_hoken_index/toushin/1314696.htm